青い目の人形

AOIME NO NINGYO

担当 小林美夏

●寸　法：41.5cm（全長）

シュネーダーが贈った「ローズマリー」

1920年頃に製作された、米国エファンビー社製の人形"ローズマリー"。1928年頃、少女だった寄贈者（中井千恵子氏）が、D.B.シュネーダー（東北学院第2代院長）からお土産としてもらったものです。当時シュネーダーは、学校経営の基金集めのため米国に一時帰国していました。首の後ろに"EFFANBEE ROSE MARY WALK TALK SLEEP"との刻印がある、目を閉じたり開いたり、「ママー」と声を出したりした人形です。2005年頃本学に寄贈されました。

日米の子どもたちをつなぐ「友情人形」

シュネーダー夫妻（前列中央）を囲んで

実はちょうど同じ頃、これと同じ人形が多数、米国から日本へ贈られていました。移民問題などによる日米関係の悪化を憂えた米国人宣教師のシドニー・L・ギューリックが、せめて子どもたちの間での友情を育みたいと全米に呼びかけたもので、宮城県では221体の人形が小学校や幼稚園などに届けられたといいます。日本からも「ミス〇〇」と称した各県の人形が返礼として米国に贈られました。シュネーダーはギューリックと親交があったようですので、もしかしたら、ギューリックのこのプロジェクトの趣旨を汲んで、この人形を少女に贈ったのかもしれません。

戦争をくぐり抜けて

1941年12月の日米開戦にともない、これらの人形たちは一転憎悪の対象となり、焼却・廃棄されていきます。しかしそのなかでも、少なからぬ人たちが人形を守り、現在では全国で300体以上、宮城県でも10体あまりの人形が現存しています。当館の人形も同じで、戦時中は肩身の狭い思いをしたそうですが、見つからないように隠し持ち、リュックに入れたり防空壕に入れたりして大切に保存してきたのだそうです。

今は「ママー」とは喋りませんが、その代わりに激動の歴史を静かに私たちに語ってくれる人形です。

引用・参考
・斎藤良治　2016　「青い目の人形（その一）　ローズマリーとベティ・ジェーン」『宮城史学』（35）宮城教育大学歴史研究会
・斎藤良治　2017　「青い目の人形（その二）　ローズマリーとベティ・ジェーン」『宮城史学』（36）宮城教育大学歴史研究会
・みやぎ青い目の人形を調査する会WEB（http://ha7.seikyou.ne.jp/home/tomo--s/top-page.htm）2020年11月1日閲覧